『歎異抄』のおはなし⑳第十三条(3)
さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし

第 13 条も今回で三回目となりました。今日は前々回、前回の続きになります。

◎前々回、前回のおはなし

前々回は、「善悪は宿業から生じる」として、私たちの善悪の行いは、「宿業」すなわち過去世の行いの結果によるものであり、悪いことをするつもりがなくても悪行を働いてしまうこともあれば、「人を千人殺せ」と言われても、業縁がなければ殺すことはできないということをお話しました。

また「本願誇り」と言って、阿弥陀仏の本願、すなわちお念仏するすべての人を救うというお誓いに甘え、「悪人正機」、すなわち「善人でも救われるのだから悪人が救われるのは間違いない」ということに甘えてつけあがって、わざと悪いことを行う人の問題が出てきました。
当時、そうした「本願誇り」の人のことを批判する人がいたのですが、こうした人は本願を疑っているとして、唯円房はかえって批判されました。

そして前回は、阿弥陀仏の本願に甘えて悪いことをしても構わないという「本願誇り」は邪見であるけれども、悪は決して往生の妨げではないということをお話しました。
「薬があるからといって毒を好むな」と親鸞聖人はお手紙で書かれますが、これは阿弥陀仏の本願という救いの薬があるからといって、煩悩という毒を好むな、ということです。
しかしこれは、悪が往生の妨げになるということではなく、阿弥陀仏は、悪を犯さずにはいられない私たちを憐れんで、そんな私たちを救うために、本願を起こされたのです。

◎『歎異抄』に登場する二つのタイプ

『歎異抄』に登場する問題には二つのタイプがあり、一つは「造悪無碍」といって、「どんな悪いことをしても往生できる」という、本来の仏教から大きく外れたタイプです。「本願誇り」もこち

らです。
もう一つは「賢善精進」で、「立派な行為をしないと往生できない」と、善人として振る舞おうとするもので、他力念仏の心に背くタイプです。

第十三条は、この「賢善精進」の人たちへの反論となっています。

◎どんな暮らしをしていても本願の前では皆同じ

「また、うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきなひをもし、田畠をつくりてすぐるひとも、ただおなじことなり。」

「うみかわ」というのは、海や川のことです。
「世をわたる」は、暮らしてゆく、生業とする、という意味です。
「しし」はライオンのことではなく、獣類、特に猪や鹿のことを指します。
「いのちをつぐ」というのは、命をつなぐ、という意味です。
「田畠」は、田と畑のことです。
「おなじ」というのは、ここでは、本願の前では善悪が不問であるのと同じように、職業の違いも問われない、という意味です。

（現代語訳）
〈また親鸞聖人は、「海や川で網を引き、釣りをして暮らしを立てる人も、野や山で獣を狩り、鳥を捕えて生活する人も、商いをし、田や畑を耕して日々を送る人も、暮らしは様々でも、どの暮らしが往生に都合がよいということはなく、すべての人はみな同じことです」と仰せになりました。〉

このようにいろいろな職業の人びとも、本願の前では皆平等なのです。
殺生を生業にしたり商いをしたりと、不当に差別されがちな職業の人も、本願に出逢えば、誇らしくそれらに携わっていくことができ、阿弥陀仏の救いから漏れることはないことが説かれています。
当時の世の中で「悪人」と言われて虐げられていた人たちをここでわざわざ取り上げたのは、職業の違いは、阿弥陀仏の本願から見れば全く問題にならないことを言うためです。
それまでの仏教では、悪人よりも善人が救われ、高貴な職業や身分の高い人が救われると説くこと

が一般的でしたが、職業にかかわらず、すべての人に阿弥陀仏の誓願が働くということは、当時の人たちに深い感銘を与えました。

◎人は縁によってどんなことでもするものです

「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべしとこそ、聖人はおほせさふらひしに、当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏まうすべきやうに、あるひは道場にはりぶみをして、なむなむのことしたらんものをば、道場へいるべからずなんどといふこと、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。」

「さるべき」というのは、そうなるはずの、とか、しかるべき、という意味です。
「業縁」とは、過去の行いが原因となって現在の結果が生ずることです。
「当時」は、現在、このごろ、という意味です。
「後世者ぶり」というのは、来世に浄土に生まれることを願う者のふりをするとか、死後の成仏をいかにも願っている殊勝な人のふりをする、念仏者のように装う、という意味です。「後世」は来世のことです。
「よからんものばかり」は、善人ばかり、という意味です。
「道場」とは、念仏者のための小規模な集会場や、念仏者の集まる所のことです。
「はりぶみ」というのは、禁止・注意事項を記した掲示や張り紙のことです。
「なむなむ」とは、何々、これこれ、という意味です。
「いるべからず」は、入れることはできない、ということです。
「賢善精進の相」というのは、賢そうに善い行いに励む、立派な仏弟子のような姿のことです。「賢善」は懸命に善いことをすることで、「精進」は一心に仏道に励むことです。
「ほかにしめして」は、外面に示して、うわべに見せかけて、という意味です。
「うちには」というのは、心の中には、胸の内には、ということです。
「虚仮」とは、うそ・いつわりのことです。

（現代語訳）
〈そして聖人は、「人は誰でも、しかるべき縁がはたらけば、どのような行いでもするものです」と仰せになったのです。それなのにこのごろは、いかにも来世の浄土往生を願う者のように殊勝なふりをして、善人だけが念仏をするべきだと主張したり、あるいは念仏者の道場に張り紙をして、「これこれのことをしたものは道場に入ってはならない」などという人がいます。それこそ、

外見にはただ賢(かしこ)そうに善い行いに励む姿を見せ、心の内には嘘偽(うそいつわ)りの心を抱いているのではないでしょうか。〉

この「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし」というのは、親鸞聖人の「業」に対する見方がよく表れた有名な言葉で、そうなるはずの業縁が兆(きざ)したら、人間はどんなことでもしかねない、と聖人は仰せになりました。

◎「賢善精進」「自力作善」の人の偽善性

唯円房は、善人しか救われない、善人だけが念仏を称えられるなどと言ったり、道場に張り紙をして善人以外を排除しようとする人に見られる虚偽(きょぎ)を指摘し、常識的な善悪観を繰り返し批判します。
そして悪人ぶる人を批判し、自力で修行できると思い込んでいる「自力作善(じりきさぜん)」の人たちは、自分は宿業的存在だと自覚していないために、うわべだけを飾って内心は嘘偽りに満ちていると、唯円房は嘆いています。
こうした「賢善精進(けんぜんしょうじん)」の「善人」が、もし自分が「宿業的存在」だと認識できれば、どれほど自力の修行をしても、煩悩は自分ではコントロールできず、戒律も守れず、瞑想の実践もすべて中途半端に終わることがわかり、「自分も悪人である」ということが少しは理解できるのではないでしょうか。
本願を信じる者は、自分は煩悩具足の身であると知る者でなくてはならず、自分は「宿業」の身だと言う事実に目覚めることが、阿弥陀仏の本願への帰依を生むのです。

◎阿弥陀仏は、そのままの姿で救ってくださる

思うようにならないわが身を、そのまま阿弥陀仏にゆだねよと唯円房は言うのであり、これは本願誇りの人も例外ではありません。
今のままの姿で、阿弥陀仏は救い取ってくださるのです。

◎「業報」にまかせて、ただ本願におまかせするのが他力

「願にほこりてつくらんつみも、宿業(しゅくごう)のもよほすゆへなり。」

「宿業」とは、宿世（前世・過去世）からの業のことで、過去の世になした行いのことです。

（現代語訳）
〈阿弥陀仏の本願を誇り、それに甘えてつくる罪も、過去の行いが縁となって生まれたものです。〉

阿弥陀仏の本願を頼りにして、自分はその本願で救われていくことを誇りに思い、罪業を犯したとしても、それは「宿業」がそういう罪を造らせていた、ということです。

「されば、よきこともあしきことも、業報（ごうほう）にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。」

「業報にさしまかせて」とは、過去の行為の報いにまかせて、という意味です。

（現代語訳）
〈ですから、善いことも悪いこともすべて過去の行いの報いによると考えて、ただひたすら本願におまかせすることが、他力なのです。〉

善いことも悪いことも宿業によるのであり、その業の報いに従って、一筋に本願を信じて念仏して生きることこそ、他力の教えというものです。

◎「宿業」と「運命論」の違い

また「あの人があのような目に遭っているのは、過去の因縁が悪いからだ」と考えるのは、間違った業論です。
これは「自業自得（じごうじとく）」や「因果応報（いんがおうほう）」の誤った使い方であり、仏教は、自らの業を自分自身できちんと引き受ける教えです。
「運命論」というものがありますが、これは古代ギリシャ以来の西洋の哲学的思想で、過去の行いや神の意志によって、現在の結果や未来が完全に決定されていると捉え、「どうしようもない」という絶望とあきらめで終わるものです。
それに対して親鸞聖人の宿業観では、過去の行為の結果としての現在があり、それで未来のすべて

が決まっているという意味ではなく、それを受け入れた上で、他力によって救われる道があるとします。
ですから「宿業」を「運命論」的にとらえるのではなく、どれほど自分が一生懸命に仏道を歩んでも、何かのきっかけによって悪に手を染めてしまうこともあるという自覚を、親鸞聖人は持っていました。
親鸞聖人は、自分の善行の限界と宿業の悪の根深さを知ることで、阿弥陀仏の本願にすべてを委ねる道を示されたのです。

◎罪深い自分は救われないと思うのは弥陀の力を疑っているから

「唯信抄にも、弥陀いかばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。」

『唯信抄』というのは、法然上人の弟子で親鸞聖人の兄弟子の聖覚法印(1167-1235)の著書のことです。親鸞聖人は聖覚法印を深く尊敬しており、常に門弟たちにこの書を勧め、自らもこれを注釈して『唯信抄文意』を著しました。

（現代語訳）
〈『唯信抄』にも、「自分のような罪深い者はとても救われないなどと思う人は、阿弥陀仏がどれほどの力をもっておられるか知っているのだろうか」と述べられています。〉

『唯信抄』の原文では「弥陀」が「仏」になっていますが、それ以外はここと全く同じ文面です。
中世の人は自分が「罪業の身」だということを理解していて、こんな「罪業の身」である自分を、阿弥陀仏といえども救ってくれるはずがないと考えていたようです。
これは阿弥陀仏の力を過小評価して、「こんな罪深い身では救われない」と思い、阿弥陀仏の慈悲の深さがわかっておらず、仏の本願力を疑っているのです。

「本願にほこるこころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。」

「決定」とは、きまっている、疑いない、確定している、という意味です。

（現代語訳）
〈阿弥陀仏の本願に甘えて本願を誇る心があるからこそ、他力におまかせする自分の信心も定まっているのです。〉

本願にお任せする心があるからこそ、他力の信心も定まるのです、ということです。

◎煩悩を滅した人には弥陀の本願は必要ない

「おほよそ悪業煩悩を断じつくしてのち本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩悩を断じなば、すなはち仏になり、仏のためには、五劫思惟の願、その詮なくやましまさん。」

「おほよそ」というのは、大体において、と言う意味で、発語においては、大体、一体全体、という意味です。
「よかるべきに」は、よいはずであるのに、ということです。
「五劫思惟」の「五劫」というのは、阿弥陀仏の前身であった法蔵菩薩が四十八の誓願を立てるために要した極めて長い時間を指します。「劫」は時間の単位で、サンスクリット語の「カルパ」の音写であり、諸説ありますが一般的なものとしては、天女が 100 年または 200 年に一度舞い降りてきて、羽衣の袖で大きな岩を撫でて、その岩が完全に擦り切れてなくなるまでの時間が一劫とされています。
この他に、広いお城に芥子粒を満たして、100 年に一度ずつその粒を取り出して、それが全てなくなるまでの時間とする説もあります。いずれにしても、想像を絶する長い時間のことです。
「思惟」はその長い間の法蔵菩薩の思案のことです。
「五劫思惟の願」は、阿弥陀仏が長い間考えてたてた願い、ということで、阿弥陀仏の本願、誓願を意味します。
「詮なく」というのは、必要がない、意味がない、という意味です。

（現代語訳）
〈大体において、自分の罪悪や煩悩を滅し尽くした後で本願を信じるのであれば、本願に甘えて誇る思いもなくてよいでしょう。しかし煩悩を滅したなら、その人はそのまま仏になるのであり、すでに仏になった者には、五劫という長い間考えてたてられた阿弥陀仏の本願も、もはや意味のないものでしょう。〉

「自力作善（じりきさぜん）」、すなわち自分の力で善行を積み、悟りや救いを得ようとすることによって悪業を滅することができるなら、他力の本願は必要ありません。
自分の煩悩を全部なくした上で本願を信じるのなら、本願に任せるということでなくていいのです。
しかし浄土真宗は、煩悩を抱えたまま仏（ほとけ）になる、という教えです。
煩悩を滅した人は、もう仏です。
煩悩を滅するような「賢善精進」「自力作善」の人には、阿弥陀仏の本願は必要ないと、唯円房は語ります。

◎『本願誇り』を批判する人も、煩悩具足の凡夫にすぎない

「本願ぼこりといましめらるるひとびとも、煩悩不浄具足（ぼんのうふじょうぐそく）せられてこそさふらふげなれ、それは願にほこらるるにあらずや。」

「いましめらるる」は、おとがめになる、という意味です。
「煩悩不浄」とは、心のけがれと身のけがれのことです。
「具足」は、身にそなわる、ということです。
「さふらふげなれ」の「げ」は様子のことで、様子に見受けられる、という意味です。

（現代語訳）
〈本願に誇って悪いことをしてはいけないと戒（いまし）める人々もまた、煩悩やけがれを身にそなえているように見受けられますが、それは本願を誇り甘えておられることにならないでしょうか。〉

「本願誇り」といわれる人たちは、煩悩を具足しているからそういう行動や主張をするのです。
そしてその「本願誇り」を批判する人もまた、実は煩悩に支配された凡夫にすぎないのです。

「いかなる悪を本願ぼこりといふ、いかなる悪かほこらぬにてさふらふべきぞや。かへりてこころをさなきことか。」

「かへりてこころをさなきことか」というのは、そんなことを言うのはかえって幼稚なことと思わ

れる、という意味になります。

（現代語訳）
〈どのような悪を本願誇りであるといい、どのような悪を本願誇りではないというのでしょうか。本願誇りはよくないと批判するのは、かえって幼稚な考えではないでしょうか。〉

「本願誇り」の人も、「本願誇り」を批判する人たちも、いずれも罪悪深重の凡夫であることに変わりないのですから、「本願誇り」の人だけが救われないというのは、なんとも幼稚な考えではないかという言葉で結ばれます。

◎「本願誇り」を批判する「賢善精進」の人をたしなめる十三条

第十三条は一見、「本願誇り」を助長する立場のように誤って考えられがちですが、実はそうではなく、むしろ「本願誇り」を批判する人びとをたしなめるという立場です。
「賢善精進」の生き方をする人々、あるいは戒律を守った生き方をしなければ救われないという人々に対する批判です。
「造悪無碍」、「本願誇り」を賢そうに批判する「賢善精進」の人たちの偽善性を突いているのが、この第十三条です。

次回は来年 3 月 20 日（金・春分の日）に、第十四条を拝読予定です。
第十四条は、念仏によってわれわれ凡夫の悪を消滅させようとする異安心についてです。

ご清聴ありがとうございました。